

高等教育における学生のコミュニケーション能力開発を巡る重要課題

企画 エマニュエル・マナロ (Emmanuel MANALO) (早稲田大学)
話題提供者 エマニュエル・マナロ (Emmanuel MANALO) (早稲田大学)
クリス・シェパード (Chris SHEPPARD)[#] (早稲田大学)
ラルフ・ローズ (Ralph ROSE)[#] (早稲田大学)
片田 房 (Fusa KATADA)[#] (早稲田大学)

本シンポジウムの背景と目的

高等教育, 特に大学における重要課題の一つに, 学生のコミュニケーション能力の開発を巡る問題がある. 大卒に求められる能力や資質を記した「大学卒業生のプロフィール」に, 今や世界的にコミュニケーション能力が含まれる時代になった (Gruba & Al-Mahmood, 2004). 効率的にコミュニケーションできる能力は, 学生時代の勉強活動のみならず, その後の職業人生全般を通して, 分野を問わず必要不可欠である. 米国の工学関連の専門家を対象とした調査では, 職場で過ごす時間の半分がコミュニケーション関連の活動に費やされているとの結果が出ている (Vest, Long & Anderson, 1996).

本シンポジウムでは, 大学教育においてこれまで十分に議論されてこなかった四つの話題を提供し, 学生のコミュニケーション能力の開発に其々どのような示唆があり得るのか, 理論的, 研究的, 実用的な観点から議論する. 尚, 本シンポジウムは日英の二ヶ国語で進行する.

説明を書く場面における図表:

なぜ学習者は十分に利用しないのか?

エマニュエル・マナロ, 植阪 友理

コミュニケーション場面において図表を活用することは, 科学教育では特に効果的な学習方略である (e.g., Ainsworth, Prain, & Tytler, 2011; Mayer, 2001, 2003). しかし, 学習者が学習場面においてどのように図表を作成し, 活用しているのかという点については, 十分な検討がなされていない.

Manalo, Uesaka, Perez-Kriz, Kato, & Fukaya (2012) は, 学んだ内容の説明を書く場面において, 理工系の大学生は自発的に図表を利用していないことを明らかにした. この結果は, 日本の学生のみならず, アメリカの学生においても同様であった. そこで, こうした現象が生じる理由を検討するた

めの調査を行った (Manalo & Uesaka, 2012). まず, イメージのし易さが異なる2つの文章 (心臓の仕組みに関する文章とCDプレーヤーの仕組みに関する文章) を準備し, 大学生にどちらかの文章を与えて読むように求めた後, その文章の内容の説明を, 日本語 (学生の母語) と英語 (学生の第二言語) のどちらかを使って書くように求めた.

この調査から2つの重要な結果が得られた. 第1に, イメージ化することが容易な課題ほど, 自発的な図表の利用は多いことが示された ($F(1, 96) = 20.13, p < .001$). 第2に, 図表の自発的な利用とTOEICで測定された英語力との間に関連が見られた. 但し, 関連がみられたのは, イメージ化の難しい文章においてのみであった ($r = .47, p < .05$). これらの結果から, 学んだ内容を説明する際の図表の利用度には, 課題要因と個人差要因が相互に影響を与え合うことが示された. さらに, 図的表象と文的表象の産出には, ワーキングメモリーにおける共通のリソースが利用されていることが分かった. 本発表では, テキストと図表の表象の産出に関わるメカニズムについて詳細に紹介する.

大学生の成績不振に関わる要因

クリス・シェパード

近年, 国際舞台で活躍するための英語力が, 特に理工系の大学生に求められる時代になった. しかし, 15.4%以上もの学生が英語必修科目の単位を落としているのが現状である. 本発表では, カリキュラムを見直し, 改善していく上で明らかにしなくてはならない成績F取得者の学習不振の共通要因を探った調査結果を報告する.

調査対象は, 2009年度から2011年度に早稲田大学理工学部にて英語科目を履修した5,406名である. 対象者は, 履修前の英語能力を表す一指標として, TOEICのプレテストを受験している.

本調査では、まず、プレテストの低いスコアと英語コースの目標が達成できないこと（成績 F）との間に相関性があるかどうかを確認するため、プレテストのスコアとそれぞれの成績（A+～F）との相関分析の他に、成績が F か F でないかを二分した相関分析を行った。次に、F 取得者の成績不振の共通要因を探るため、プレテスト以外の属性（入学区分、学科、年齢、男女差等）を取り上げ、重回帰分析を行った。

その結果、プレテストと成績 F の相関関係は中位であった ($r=-.56$)。また、F か F でないかを二分して行った調査では、相関係数は低かった ($r=-.11$)。さらに、成績 F の共通要因を探るための重回帰分析では、プレテストのスコアとその他の属性は説明要因となっただけではなかった。従って、これらは成績 F の要因とはいえないことになる。適切なカリキュラムの改善にむけて、学習への動機や LD (学習障害) の可能性、また学習スタイルや個々の学生のおかれている社会的環境など、きめ細かい調査の必要があるといえる。

第二言語運用における躊躇現象と流暢性

ラルフ・ローズ

発話中に偏在する躊躇現象は様々な形をとって現れる。沈黙による無声休止(silent pause)や発声を伴う有声休止(filled pause, [えーと]や[um, uh]等), 繰り返し, 言い直し, 単語の延長([a-nd, so]等)がある。当分野の先行研究により, 第二言語の流暢な話者には次の特徴があることが示された。(i)発話速度がより速い(Cucchiari, et al, 2010)。(ii)無声休止時間が短く, その発生頻度も低い (Riazantseva, 2001)。(iii)有声休止の発生頻度は低い(Rieger, 2003)。しかし, これらの研究は, 話者の第一言語の運用能力をベースラインとして考慮していないことが難点といえよう。

本発表では, この難点に対処し, 第二言語学習者の躊躇現象をより詳細に検証するための情報提供を目的とした長期プロジェクトについて報告する。プロジェクトの特徴は, 日本語 (被験者の母語) と英語 (被験者の第二言語) の双方を使った並列タスクを課し, 二言語コーパスを構築する点にある。被験者の一般英語能力情報 (TOEIC スコアを使用) と英語流暢度情報 (英語母語話者による評価を使用) も収集した。

本研究では, 発話速度, 無声休止時間, 無声休止頻度と流暢性の評価との間に相関性のあることが示され, 先行研究の成果と一致する結果となった。しかし, 被験者の母語の特性とは関連性のないことが分かった。一方, 第二言語の上級学習者は, 単語をより短く発音し, 無声休止, 有声休止ともにその時間が短いことが示された。この結果は, 測定される躊躇現象の種類によって学習者の上達度の評価に違いが出ることを示している。本発表では, 躊躇現象に言及する ACTFL や CEFR 等の能力評価スキームに対して, この結果が重要な示唆を持つことを中心に検証を進める。

大学における広汎性発達障害と インクルーシブ教育の可能性

片田 房

近年, ディスレクシア (読み書き障害) を中心とする LD (学習障害) や ADHD (注意欠陥多動性障害), また, 明らかな知能障害が認められない高機能自閉症やアスペルガー症候群が, いずれも中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定され, 身体障害, 知的障害に加えて第三の障害 (広汎性発達障害) としての認知が進んできた。義務教育界においては通常学級に 6% を超える LD, ADHD, 高機能自閉症の児童生徒がいると報告されている (文部科学省, 2002)。英語圏においては LD 児だけでその数値が 15%~20% にも及ぶ報告もあり, 日本における潜在的な数値は 6% をはるかに超えるものと推定される。

大学における実態は明らかではないが, とりわけギーク症候群 (Geek syndrome) の異名をとる高機能自閉症・アスペルガー症候群は, 社会性やコミュニケーションの障害を特徴とする一方で, 時に高い集中力の伴う優秀な才能と併存するだけに, 大学という教育機関に相当数の対象学生がいるものと推察される。しかし, その実態を把握することは容易ではなく, 従って教育支援体制も未開拓の分野である。

本発表では, 広汎性発達障害について, 先進諸国の報告・研究例を交えて議論し, 世界の教育のグローバル・スタンダードとして定着しつつあるインクルーシブ教育 (障害の有無にかかわらず個々の学生のニーズに対応する多様性を内包する教育) の理念が大学の統一カリキュラムにどのように反映され得るのかを模索する。